

# 野 菜

## 1 露地果菜類の病害虫防除

県内は6月8日頃に梅雨入り（平年に比べ 1日、昨年に比べ 2日遅い）した模様ですが、梅雨明けまでは、多湿、日照不足などにより特に、「病害」が発生しやすい時期ですので、定期的な観察による早期発見、予防散布を心がけましょう。

- (1) 草勢の低下と併せて発病が目立ってきますので、適正な追肥により草勢維持を図りましょう。
- (2) 風通しや葉の受光態勢を確保するために整枝や摘葉を行いましょ。特に収穫果実のある位置より下の横枝、腋芽は早めに除去しましょう。
- (3) 強い雨による土の跳ね上がりは病害発生の原因となるため、敷きわら等を行いましょ
- (4) 薬剤防除は、降雨の前を中心に散布しましょ。散布後薬液が乾かない状態では降雨により効果が低下しますが、2～3時間後に降雨があった場合は十分効果が期待できます。

（降雨後の薬剤散布では、降雨の量によっては散布のためにほ場に入ることができず、結果として適期に防除ができなくなってしまうことがあります。）

また、高温・干ばつ（乾燥）条件が続くと、「害虫」の発生が増加します。観察による早期発見、発生確認後は発生密度が低いうちに防除を行いましょ。

○オオタバコガ：成虫発生後の卵～幼虫の時期が防除時期となります。

（平坦部の雄成虫の平年の発生ピークは7月下旬、8月下旬、9月下旬頃）

○アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類：

虫体が小さく、高温乾燥条件では成長が早く、多発すると防除が困難となります。花の中、葉裏の観察により早期発見により防除時期を逸さないように注意します。アザミウマ類は青色の粘着板、アブラムシ類は黄色の粘着板に誘引されます。

## 2 アスパラガスの管理

### (1) 茎枯病防除

茎枯病の初発期を迎え、露地ほ場での発生が懸念されます。罹病茎（写真1）を発見したら、切り取ってほ場外に持ち出し、埋設又は焼却処分してください。感染拡大を阻止するには、感染源を断ち切ることが重要ですので、罹病茎や前年の残茎等の感染源はほ場内にはおかないことを徹底しましょ。

立茎期の畝上への盛り土や有機物マルチによる被覆、簡易雨よけの設置は茎枯病の発病抑制効果があります。薬剤防除だけでなく、必ずこれらの耕種的防除と組み合わせて行いましょ。



写真1 アスパラガス茎枯病

### (2) 倒伏防止対策（支柱・フラワーネット）

立茎後の茎葉が風にあおられると株元が傷み、光合成と養分の蓄積が阻害されます。支柱やフラワーネット、テープ等を用いて養成茎を安定させましょ。ネット等は、養成茎の伸長に合わせて高さ60cm程度と100～120cmの2段で張るとよいでしょう。

### (3) 立茎数の管理

養成茎の立茎後でも周辺部から新たな若茎が萌芽してきます。これらを放置しておくと、茎葉が混み合い、薬剤散布が届かず、病害虫が発生を助長します。春どりのみの作型でも定期的に茎数の整理を行いましょう。立茎数は株あたり5～6本程度を基準とします。原則として一度立茎した養成茎は、そのまま晩秋まで健全に保つよう努めます。しかし、病害虫等により養成茎が黄化・枯死した茎は株元から切除し、新しく萌芽した養成茎に更新しましょう(なお、更新可能時期は7月末までが目安)。

### (4) 長期どり・二季どり(春・夏秋どり)に向けての下枝整理

立茎をはじめて1ヶ月ぐらいから夏秋芽の萌芽が始まるので、地際から高さ60cm付近までの下枝整理も行いましょう。長期どりなどでは、若茎の着色・品質の向上のため、不要な茎や下枝整理、茎枯病の罹病茎の除去を、できれば晴天日を選んで行いましょう。

### (5) 梅雨明け後の水管理(かん水)

土壌が乾燥する場合は、10～14日間隔で20mm程度のかん水をします。排水不良園では1回のかん水量を少なくし、かん水回数を増やしてください。

## 3 スイートコーンの管理

主要害虫であるアワノメイガは葉裏に卵を塊状に産卵し、孵化した幼虫は葉脈、葉の付け根から茎内に侵入、雄穂や雌穂を食害します。発生の有無は、葉のつけ根や稈から虫糞が出ていないか、雄穂が食害により折れていないか等で確認してください。薬剤防除は雄穂や葉のつけ根にしっかりかかるように行ってください。

また、品種により主茎の下位節位から数本の分げつ茎が発生することがあり、この分げつ茎は主茎に栄養を転流している他、倒伏防止にもつながります。分げつ茎除去の有無の試験(表1)では、除去しない方が穂重は重く、先端不稔が少ない結果となっています。作業のじゃまにならない範囲でそのまま残しますが、分げつ茎を除去する場合は、刃物などで上部を切除し、節の部分を残すようにします。

表1 除げつ、除房処理が収量、品質に与える影響(中信農試 平成10年を一部改変)

品 種	処 理	苞付き			先端不稔長	粒列のそろい*	Brix
		穂重	長	径			
		g	cm	cm	cm		%
ピーター610	除げつ	355	24.4	5.9	3.3	1.3	18.0
	除房	376	25.9	6.0	2.1	1.1	17.2
	除げつ+除房	347	25.7	5.5	3.5	1.0	18.2
	無処理	396	25.5	6.2	1.4	1.1	17.5

注)4月23日は種の露地マルチ栽培

\*:1(良)～3(不良)

## 4 夏秋キュウリの草勢管理

葉の養分を蓄積する力(光合成能力)は展葉後10日頃から増加して35日頃にピークとなり、その後は急激に減少します。下位の老化葉の摘葉は主枝の葉が20枚以上展葉頃から始めましょう。なお、摘葉は1回に株あたり葉2～3枚程度を目安とし、過度の摘葉は草勢低下につながるのを控えましょう。1日の光合成の60～70%を午前中に行うため、葉に光が十分に当たるように整枝を行い、かん水や追肥によって草勢維持を行います。また、根は土中の浅い部分に繁茂するため、乾燥には弱く、真夏時には1株あたり・1日に2ℓ以上の水を消費するため、少量でこまめなかん水が重要です。かん水は早朝または夕方に行い、畝間かん水では畝上に水がつくような多量のかん水は禁物です。追肥は草勢を見ながら、窒素・カリとも1回あたり成分で0.1～0.2kg/a程度とし、5～10日間隔で行います。